

富士紀行 (16) 国境の町「須走」

駿河と甲斐の国境の町でもある。富士山登山道の町とは違う顔と歴史を有している。それを管見しよう。富士川正面若しくは籠坂峠正面が甲斐と駿河との主たる接近経路である。それ故に両国の軍勢が籠坂を南下し或いは北上している。どちらかと言えば南下した方が多いようだが・・・

静岡県と山梨県の県境は籠坂峠の頂上そのものではなく、幾分静岡側に下がったところである。私の常識から言えば、分水嶺をもって境界とべきであるが、静岡・山梨県境の場合には甲斐の勢力が強く、結果的に駿河側が押し込まれた形になったのであろうか。

国境の町には大きく二つの役割がある。一つには国境警備であり、国境を通過する人・物に関税をかけて徴収することである。

須走には道者関（寺社や信仰の山・霊場などへ参詣する人（道者）から関銭をとる目的で設置した関所）がおかれていた。これとは別に、籠坂峠を越えて駿河と甲斐を移動する荷物に関銭をかけていた。このために須走には関所がおかれていたと考えられる。永禄6年(1563)、北条氏元が、芹沢伊賀守に出した印判状が須走関所を文献で確認できる初出の書類である。（小山町史から）

また、前述の芹沢伊賀守に宛てた別の文書によると、芹沢伊賀守は国境警備の任務も有していたようである。国境警備、関銭徴収を併せ道者関の任務をも須走関は付与されていたと考えるべきだろう。

小山町の古戦場としては、太平記や梅松論に描写されているが、足利尊氏・直義兄弟が新田義貞軍を破った戦いの場所である竹之下が有名であり、竹之下には「竹之下古戦場」の碑が建てられている。箱根と足柄峠が関東防衛の緊要地形・要害であるのと同じように、須走も甲斐との関係においては重要な地位を占める。

須走を中心とした古戦史や軍事に関わる事項を紹介しよう。

- 1 古事記によると、日本武尊は、足柄峠を経て甲斐の酒折の宮前進しているが、当然須走や籠坂峠を通過したはずである。
- 2 平将門の乱は、駿河にまで波及した。天慶3年(940)2月に平貞盛、藤原秀郷等によって討ち取られ、収束するのであるが、この頃、弟将武は伊豆、駿河で転戦中であつたが、甲斐の国で戦死したとされている。つまり、彼は伊豆から駿河国内を転戦して、更に籠坂峠を経て甲斐国内に進入したことを物語っている。
- 3 源頼朝が旗揚げ直後、石橋山の合戦で敗れ(1180)、甲斐源氏に救援を求めに北条時政が須走籠坂峠を通過した筈である。

4 戦国時代

深沢城の攻防を前後する時期には武田軍が須走周辺に帯陣し、これに対する北条軍が足柄峠に集結し、或いはそこから兵を動かした。又、甲斐に出兵する北条軍、伊豆を攻め

る武田の大軍が須走を通過した。小山町域は、今川・北条・武田の3大名の領国の境界に位置し、これらの大名間での戦いには必ず要点となったのである。中でも、武田の駿河侵攻によって引き起こされた駿州錯乱は、武田・北条の全面戦争に発展した。深沢城と足柄峠を抱える御厨地方は両軍対決の場となった。

深沢城：御殿場市深沢（旧246号を小山方向へ小山町との境界近くに所在）

① 梨ノ木平の戦い

甲斐の武田信虎（山内上杉憲房と同盟）と駿河の今川氏親（北条氏綱を傘下とし）はある意味では宿命的な敵対関係にあった。大永6年(1526)、信虎は上洛の予定であったが、北条氏との和議が進展しなかつたため取りやめた。ところが、6月23日、長い間中風を患っていた氏親が病死した。元服しているとは言え、わずか14歳の氏輝が家督を相続した。今川家の家中不安に乗じて、信虎は、好機到来とばかりに、直ちに出兵、都留郡山中（山中湖村）に布陣して駿東郡を窺った。今川・北条は急遽、須走に兵を送った。7月晦日、籠坂峠を越えてきた武田勢は、峠の麓の「梨ノ木平」で、駿河勢と対戦し、勝利を収めた。梨ノ木平は、富士高原ゴルフ場付近、またはゴーカート場のある一帯であろう。字名として、「梨ノ木平」が残っているという。「梨の木平は、古、加古坂と須走の中間にあり、平地にして広し、古え、梨子の古木ありし故地名となれりけるとぞ云々」「甲斐国誌」にあるという。（出典：既述）

② 今川・武田同盟と河東の一乱

氏輝死して、花倉の乱が起こり、勝利した承芳が還俗して義元を名のった。義元は武田信虎と婚姻を結び同盟関係を樹立し、これまでの同盟者であった北条氏とは袂を分かった。天文6年（1537）北条氏は甲斐武田と駿河今川の同盟樹立に対して、駿河に出兵し、興津（清水市）迄を焼き討ちにした。北条を牽制する目的を持って信虎は須走に出兵、陣を張った。

駿東、御厨地方は北条早雲以来北条氏の支配下にあったと思われる。前記の作戦時に、北条方は須走、御厨の武士団を持って、武田軍の進入に備えたが、易々と進入を許してしまった。

③ 報復のための夜襲の敢行

翌天文7年、武田勢が籠坂を越えて一挙に南下した。この時期、北条軍主力は武蔵にあり、駿河は手薄であった。従って、武田勢は駿東南部奥にまで進入したと思われる。それで、報復のために、5月、10月の二回にわたり、吉田に夜討ちをかけた。

天文14年(1545)、北条氏は駿河から完全撤退し、駿東郡全域が今川領となり、当地方には暫しの平和が訪れた。

④ 甲斐への塩留め

武田信玄は駿河侵攻に向け、着々と準備を進めていた。両国の緊張は次第に高まってきた。今川氏は対抗策として、甲斐に塩が持ち込まれないように塩留めを行った。この事実は今川氏元が永禄10（1567）年8月、鈴木若狭守、武藤新左衛門尉、芹沢玄蕃守の3人に出した文書から確認出来る（小山町史）。即ち彼らの任地から、竹之下、神山、須走では塩留めが行われたことを物語っている。